

〔書評〕

彦坂佳宣氏著 『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』

日 野 資 純

本書の「あとがき」によれば、本書は、著者が過去二十年以上にわたって、近世尾張方言を扱ってきた成果である。著者の指摘によれば、従来の近世期方言の研究では、前期上方語、後期江戸語を中心としていたが、その周辺の地域についても、東西両方言の緩衝地帯であるという点から、もっと十分な研究がなされるべきであった。著者はその点に着目し、自ら発掘した尾張の資料を中心に考察を進め、近隣的美濃・三河・伊勢の方言についても、上方語との比較対照という手法を用いた。

そして、この地域につき、第一部資料論（尾張とその周辺地域の資料構造・方言資料としての尾張戯作類・説教記録『お経様』・雑俳資料）、第二部尾張近辺を主とする近世期方言の諸相（音韻・音便・活用・表現法・待遇表現）、終章（近世語における近畿・東海近辺の方言景観）という構想で、その研究成果を展開した。叙述の方法は実証的であるとともに慎重であり、それがおのずから、先行研究の批判、修正、前進につながっている面が多い。

独自の見解を述べる場合にも、他の研究者の説をよく参照してあるので、独断的な点は見られない。

例えば、近世語資料を用いて尾張方言の連母音の融合を扱う場合、芥子川律治氏『名古屋方言の研究』を手がかりとしつつも、芥子川氏が「雪隠へはへるを見ておつたから……滑稽祇園守」などの傍線部の表記につき、「アイが〔æ〕の例」と見ているのに対して、著者は「ある程度の変母音の存在」は想定しながら、「（こういう例だけでは）確例と言えるかどうか判断できないが」というように、慎重な構えを示している。仮名表記から、過去の時代の音韻の実態を把握するのが難しいのは当然であるが、その点につき大胆になりやすいことへの警鐘として、貴重な見解である。（125～126頁）

以下、従来の方言研究の成果などと対照させながら私見を述べる。

著者は近世の方言につき、当時の文献資料に基づく記述を進め

ながら、当該地域の現在における方言の状況についても述べることが多い。例えば雑俳資料（第一部）「掃溜燃ス嗅サ」（法華寺たまかしは・四）の「嗅サ」を方言形「カザ」と考え（66頁）、これに関する言語地理学的な研究の例として柴田武氏「言語地理学の方法」等を挙げるが（85頁注（3））、現在の方言にふれるなら、できれば自然談話の例まで出してあれば、そこに実際に挙げた近世語の文例と、直接対照させることが可能になるので、さらに有効であつたと思う。

例えば尾張近辺に下一段式サ変動詞セルが見られたことを『東海道中膝栗毛』、『木曾街道続膝栗毛』その他の資料で述べてあるが（183頁184頁等）、現代の方言の状況については国立国語研究所刊『日本言語地図』55を引いて「東海西部地域にその分布は厚い」としてある（187頁）。もちろんこれで大筋はわかるのだが、欲を言えば、その上に、NHK編『全国方言資料第三巻東海北陸編』（一九六六年刊）所収の、愛知県海部郡田村小家の自然談話の例、「地震で」ウチガ アノ コケテマツタン（倒れてしまったよ） ドーセルジャーテッテヨ（418頁）などの実例が引いてあれば、なお一層説得力が増したであろう。また、尾張方言の素人戯作者・石橋庵真酔の滑稽本等で、名古屋の主人公は「洒落た言葉づかい」としてサ変型を交え、土地人は下一段式であるというような、位相差に関係のありそうな状況が述べてあるが（194頁）、現代の方言でもこういう使い分けがあるかどうか、興味ある課題と言えよう。なお、尾張付近の資料に「貸す」を表す「貸せる」

の例が頻用されることを各所で述べてある（70、211、397頁等）が、これなどは『日本言語地図』第二巻の70図、「貸す」の全国分布と対照させれば、さらに有益であろう。ことに、『日本言語地図』のこの図の解説に、カセルという語形は「文献での傍証を得にくいこと」を難点としているのだから（『日本言語地図解説——各図の説明2』27頁）、著者の探究によって有力な文献資料を補充することができるのである。文献による国語史研究と方言研究とが協力するという機会は、現在でもそれほど恵まれてはいるわけではないので、著者のこういう研究が現れたのを大きなチャンスととらえて、今後、十分な現実的協力関係を築くことが望まれるのである。

ただ、こういう希望を一方的に述べるだけでは不十分で、著者に申しわけない。すでに本書では「尾張近辺における二・デの分布」の項（第二部 四 表現法）で、国立国語研究所「方言文法全国地図」第一巻とのつきあわせがしてあり（227頁）、『名古屋・方言研究会会報』一九九一年五月刊第8号所収の著者の論文でもふれられており、今後も「現代方言の調査にたつた考察」を自ら予定しているのだから（233頁）、この面での研究の発展が、十分に期待されるのである。

なお、第一部雑俳資料の中の「(2) 狂俳にみる言語的性格」に、狂俳の「待遇表現」における「文末詞」の記述が見える。例えは、

(1) 松露搜す松原 エイそな申と船人来る 嘉永二 浮草集・

初 6オ (80ジ)

とあり、文末詞「な申」などを挙げて、

文末詞には、庶民の生きたことばづかいが聞こえてくるようである。(同)

と述べられているが、文末詞を重視する立場は、もと広島大学教授であつた藤原与一氏と共通する。藤原氏は文末詞を主題とする『方言文末詞(縣)の研究(上)』(一九八二年春陽堂書店刊)で日本語は、文の表現構造が、述部を後置する、表現「文末決定」の構造であるために、いよいよもつて文末に文の訴え構造の特色が顕示されがちである。(はしがき 111ジ)

と述べているが、彦坂氏の着眼点と通うものがあつて興味深い。江戸語資料を永年扱う著者と、方言研究に多年の努力を傾ける藤原氏が、ともに文末部に関心を寄せていることは、文の表現が人間の直接的な自己表現の基本である点から見て、言語研究の基本的立場の重視という見地から、私も共感を覚える。

ところで、本書の尾張方言の資料と現在の方言資料とを、なお詳しく対比させてみたい。

右と同じ狂俳の資料中に、「形容詞連用形音便」の、「はけしなる」(ハゲシナル)、「甘ふなる」(アモウナル)等が見える。

○念仏講 蚊こくわれてはけしなる 天保二年 続太はし集・

初 9オ (75ジ)

○啼習ふ驚 不意と烟草が甘ふなる 嘉永二年 浮草集・初 1ウ (同)

こういう傾向は従来関西方言の主流と見られてきたもので、早く榎垣実氏『京言葉』(一九四六年、高桐書院刊)に(154ジ)、

・ホシなつてきた(欲しくなつて来た)

・えらいアツなつたな(大変暑くなつたね)

などと記されているが、現在の愛知県方言としても、次のように現れている。

・名古屋のことば(1) (『愛知県の方言』(愛知県教育委員会著作編集、文化財図書館刊行会刊、一九八九年三月)所収。山田達也氏・丹羽一彌氏執筆)

マ コンナニ サムナリマス トツイツイ コチラサメ

アモ トオナツデ シメアーマシテナモ。(明治生まれ女性。

まあ、こんなに寒くなりますと、ついついこちら様へも(足が)

速くなつてしまひましてねえ。) 198ジ。

同書の解説によれば、これは「いわゆる上町の商家風のことば」であるというが、上の「浮草集」と比べると、「甘ふなる」のような「ウ音便形」が、ここでは「サムナル・トオナル」のような「短音形」として現れているので、両者を比較する限りでは、この地域でも、恐らく京都方言と同様な短音化現象が起こつたのではないかと推定される。もちろん、より多くの資料の比較が必要ではあるが、そのような比較考察を加えるべき近世期方言の資料が提供されている点で、本書の記述はまことに有意義である。

以下になお、特に方言に関連のある事項が扱われている部分について、私見を述べておく。

駿河に関係の深い文献として、洒落本『阿部川の流』(『^{アヘ}カハナリ)と地誌『駿国雑志』(『^{アヘ}カハナリ)が引かれている。後者は『駿国雑誌』として272ページに引いてあるが、内閣文庫にある原本も、一九〇九年刊の活字版も『駿国雑志』である。また、推量の助動詞「ウズ形」がこれに掲載されていると述べてあるが(272頁)、実例は省略されている。文献名だけが出ていて実例を欠くのは、この文献に限らず、『木曾街道統膝栗毛』なども同様であるが、このあたり、ほんの一例でもよいから実例が出ていれば、より多く理解も深まったであろう。特に『阿部川の流』には「き(来)さへすればじつきやらすにの」、『駿国雑志』には、

ず 食をくはず、吞をのみず、行をゆかず、取をとらず、なと云へり。江都の人食ふ、ゆかう、と云ふに同じ(一九〇九年刊の活字版28頁)

のように、わかりやすい用例が出ているからである。

なお、『阿部川の流』については「信頼度に問題はあるが」(272頁)と記されているが、少なくとも前掲の「やらす」については、『駿国雑志』の記述からも信用してよいのではなからうか。『駿国雑志』所収の方言の信頼度については、『東海道中膝栗毛』(駿府出身の一九の執筆)の駿河の部分の記述が写実的であること、膝栗毛所収の方言が『駿国雑志』の応用でよく理解できること等から、私はかなり確実だと考えている(拙論『東海道中膝栗毛』の読解と『駿国雑志』の方言——「えれえれ・ひやうたくれ」など——)(拙著『方言学論考——観察と実践——』一九八四年東

宛社刊)参照。

次に、否定推量や勧誘表現の「行かまい」「やらまい」等が「行こまい」「やろまい」等へと変化したことにつき、芥子川律治氏の説にふれながら、次の主旨が述べてある。

「行かまい」「やらまい」等は、「行かうまい」「やらうまい」等から「アウヴァー」事象の関与により成立したという芥子川説を採らず、マイ・ベイなどがかつて未然形接続ともなった事実なども考え合わせて、「行かまい」「やらまい」はそのゆれの産物であり、「未然形プラスマイ」である可能性が高い。そして、後にウ(ヨウ)形が上方地方から進出定着して、合音的な形態となったことに影響されたものか。(118～119頁 摘要)

そして、
(今日、「行こまい」形などの分布はこれとよく重なり、三河にはない。119頁)

と記されているが、この()内の分布の記載はどのような成果に基づいているのか、右の叙述だけでは必ずしも明らかではない。124ページ注(4)に挙がっている江端義夫氏の論文「中部地方方言の推量表現の分布について」(『国語学』110(22頁*))や、著者自身の「東海西部地方における推量辞の分布と歴史」(『国語学』179(22頁*))などにも、イコマイにはふれられていない。

私の知る限りでは、芥子川律治氏の論文「愛知県の方言」(『講座方言学』6 中部地方の方言)(一九八三年一月編纂)に、次の

表が「勧誘表現」として示されている。

勧誘の助動詞マイ(マイカ)は愛知県の特異な助動詞である。
現在では尾張と三河との間に次表のように明らかな対比が見られる。

語例	尾張	三河
行く	イコマイカ	イカマイカ
やる	ヤロマイカ	ヤラマイカ
見る	ミヨマイカ	ミマイカ
為る	シヨマイカ	シマイカ
		セマイカ

(同書233頁)

また同書、「新潟県の方言」(剣持準一郎氏、263頁)にも、上越市戸野目方言の実例として

エッシヨネ エゴマイカネ(一緒に行かないか)

とあり、平山輝男氏ほか編『現代日本語方言大辞典6』(『現代日本語方言大辞典』(平山輝男氏ほか編)には、長野県栄村秋山と、兵庫県加古川市の実地調査の記録に、それぞれ「エゴメア・イコマイ」を含む例文があるので、かりにこういう地域にあつてもイカマイからイコマイへの変化が突きとめられるとすれば(言語地理学的調査や話者の内省等で)、著者の考え方がより一層確実性を増すことになるであろう。(上記大辞典494頁)

最後に、サ行イ音便の問題にふれておきたい。

第二部の「二音便」の項で「(5)サ行イ音便の分布」が扱

われており、「駿府あたり」につき、雑俳の全国版の中の

○追ひ出した其日懸りハ巡り来て スンプ 雑俳・花の兄
期1 15ウ

を挙げ、「(駿府におけるサ行イ音便の存在は)いくら可能性がありそうである」とした上で、

今日でもこの近辺にサ行イ音便は劣勢な模様である。(146頁)と述べてある。すなわち旧駿河近辺には今日でもサ行イ音便が劣勢だと見られているが、現在の方言の状況はその通りであろうか。ここにはその根拠が挙げられていないので、静岡県方言の研究成果を参照してみよう。

中條修氏は静岡県方言の臨地調査に基づき、この県のサ行イ音便について次のように述べている。(静岡市大谷方言)

サ行四段動詞のイ音便化は盛んで、三拍以上の動詞の過去形は音便形をとる。

オトイタ [otoita] (落とした)、サガイタ [sagaita] (搜した)、ツフイタ [tsubuita]

このサ行イ音便の等語線は、東海道筋では静岡県と神奈川県の県境とほぼ一致する。「下略」(『静岡県方言』(平山輝男氏ほか編『現代日本語方言大辞典1』(『現代日本語方言大辞典』) 182頁)

なお「出す・刺す」などアクセントが頭高型の語には音便が認められるが、「押す・越す・足す」など平板型では音便化しない傾向が強いという(中條氏)。

音便化の程度や分布範囲がどれほどであれば「盛ん」であり、

「劣勢」であるのか問題だが、中條氏はまた、『講座方言学6・中部地方の方言』所収の「静岡県の方言」で、この音便が特に県西部で、また、高年層で優勢・活発だとしている(同書152頁)。

こういう音便化は動詞の種類・使用度数や話者の年齢等にも関係するだろうから、実態解明には特定の調査を要するであろうし、

一方で、実際の

自然談話の資料等にもあたってみる必要がある。

私は静岡市

麻機一九二七年

生れの女性「A」

(高年層)と同

市南安倍町一九

四四年生れの男

性「B」(中・高

年層)に面接調

査して、次のよ

うなサ行イ音便

形を確かめた。

(一九九九年二

月)

A氏	B氏
〔秘密を〕 明カ ^タ イタ (明かした)	明カシタ
〔人を〕 追 ^タ イ出イタ (追い出した)	追ン出イタ
○〔人を〕 オケー ^タ (起こした)	オケー ^タ
〔昔を〕 思 ^タ イ出イタ (思い出した)	思 ^タ イ出イタ
○〔物を〕 カキー ^タ (隠した)	カキー ^タ
〔山を〕 崩 ^タ イタ (崩した)	崩イタ
〔よそから〕 越 ^タ イテキタ (越して来た)	越イテキタ
〔物を〕 探 ^タ イタ (探した)	探イタ
○〔米を〕 チャー ^タ (出した〔供出した〕)	チャー ^タ
〔物を〕 散ラカ ^タ イタ (散らかした)	ヒッ散ラカイタ
〔ノミを〕 ツブ ^タ イタ (つぶした)	ツブイタ
〔くせを〕 直 ^タ イタ (直した)	直イタ
〔水を〕 流 ^タ イタ (流した)	ナゲー ^タ
○〔飯を〕 ノケー ^タ (残した)	ノケー ^タ

という変化
による。

「オケー^タ」は [okoita → oke:ta]
「カキー^タ」は [kakuita → kaki:ta]
「チャー^タ」は [daita → dæ:ta]
「ノケー^タ」は [nokoitā → noke:ta]

「明カス・越ス・探ス・散ラカス・ツブス」はアクセントが平板型であるが(大谷方言とは異なつて)音便化しており、また静岡市の位置は(県西部でなく)中部であるが、これだけの音便化が見られることになる。そして、たまたま私の手元にある県内の自然談話資料に即して言ふと、中部以外の地域でも、明治生れなどの高年層から一貫してこのイ音便化が引き続いていることがわかる。今、「出シテ」が「チャー^テ・ダイ^テ」になる実例を中心として示してみる。

○静岡市曲金^{マダリホネ}(一八八七〔明治二〇〕年生れ女性、一九五五年収録)〔県中部方言〕

アノー クサーアノー セーオ^{タイ}アイデ

草は あの、 精をだして

トッタ トケート アノー リンサンチン

取った ところ〔所〕へと あの、 林さんのうちの

サキヤーホーワ ハーエタツケネヤー

境の方は 生えたつけね、(18^{ジヤ})

○静岡市南^{アサバ}(麻機)⁽⁴⁾(一九九一〔明治四四〕年生れ男性、一九七

五年収録文字化)〔県中部方言〕

〔紀元節の歌を歌うことも〕ヒジョーニ ムカシヨ

非常に 昔を

オモイデアーデ エート オモナー

思い出して いいと 思うなあ。(313^{ジヤ})

○浜名郡新居町新居⁽⁵⁾(一八九八〔明治三二〕年生れ男性、一九七

〇年収録文字化)〔県西部方言〕

ソイタデ ヒクク〔笛の音を〕^タイデ

だから 低く 出して

クリヨ

くれ(8^{ジヤ})

○小笠郡大東町大坂⁽⁶⁾(一八九九〔明治三二〕年生れ男性、一九七

〇年収録文字化)〔県西部方言〕

コートーガッコーオリガ ニマンサンセンエンダー

高 卒が 二万三千円だの

ゴセンエンダーテツテ コーコクオ

五千円だのつて 広告を

^タイデ ドンドン ポシユースルデシヨ

出して どんどん 募集するでしょう(43^{ジヤ})

曲金ではこのほか「ヒヤキヤーテ(ヒヤカシテ)浸して」・ハ

ヤーテ(生やして)・イノカイチャー(動かしては)・オケーテ(起

こして)等が現れ、麻機では「コイテ(引つ越して)・クジーテ

(崩して・前掲A氏回答にもあり)」等が現れ、新居では「オト

イタナー(落としたなあ)・ゴマカイチャッタ(ごまかしちゃつ

た)・トーイチャッタ(通しちゃつた)」等、大坂では「ハナイテ

ルイトニ(話しているうちに)・タメイテ(試して)・ツキタオイ

テ(突き倒して)・(貨幣を)クズイテ(崩して)」等が現れてい

る。まだ調査は十分ではないが、大体の状況は以上のとおりであ

る。「盛ん」か「劣勢」かの判断は難しいが、彦坂氏の指摘をも

ととして静岡県の実情にふれてみた。少なくとも、著者が駿府の

雑俳資料に基づいて示した「追い出た」は、現在静岡市の中高

年層に保たれていると言えよう。

これに限らず、著者が本書で述べた近世期方言の資料が、現在

の方言でどの程度保存されているかを検証する作業は、今後の大

きな課題である。それについて、確実な事例に基づく成果を豊富

に提示されたという点で、特に方言史研究上、本書の貢献はまことに大である。私はたまたま、静岡県（旧駿河を含めて）の方言との関連を中心に述べたが、その他の地域の方言についても、比較考察が加えられるならば、さらに有意義であると思う。

ただし、私自身は、近世期方言を専門として扱った経験は乏しく、従来は、ごく限られた地域の方言と近世期方言との対照を多少考えてきたにすぎないので、著者の専門的な御研究を評する資格は十分でなかった。従って著者の御見解の一部について私見を述べたにすぎないことを、御了承いただきたい。

尾張中心の近世期方言の諸相につき、新資料をも駆使して堅実な成果を学界に提出されたという点で、新世紀の方言学へ向けての著者の貢献は、まことに大きいと言わねばである。

注

(1) 『国書総目録』第五巻に、「駿国雑志すまのくわさし」四九巻七八冊」とある。

(2) 以下に私の調査結果を述べるが、従来の研究ではすでに小泉保氏が、静岡県の西中部方言を基本として、以下のようなサ行イ音便形を取り上げておられる。「語法」(『図説静岡県方言辞典』静岡県方言研究会・静岡大学方言研究会共編、一九八七年三月吉見書店刊)

「ナンニモ カカズニ ワタイタ」 「ナンニモ カカッコシ

ワタイタ」(何も書かないで渡した。)(51頁)

「ヨマス」↓「ヨマカイト」↓「ヨマケータ」(東部)(同)

「カミヨー トバカイト」紙を飛ばした。(53頁)

(3) 山口幸洋氏『方言文資料報告2 静岡市旧市域方言』(静岡市曲金方言)一九七四年同氏刊

(4) 国立国語研究所編『方言談話資料5——岩手・宮城・千葉・静岡——』一九八一年同研究所刊(静岡の部は日野が担当した)

(5) 山口幸洋氏『方言文資料報告(5) 静岡県浜名郡新居町新居方言(2)』一九七八年同氏刊

(6) 山口幸洋氏『方言文資料報告(1) 静岡県小笠郡大東町大坂方言(上)』一九七四年同氏刊

(一九九七年三月三十一日和泉書院発行、A5版・四一〇ページ)
(ひの・すけずみ 静岡大学名誉教授)